

# 民主島根

2021年  
**4.25**  
第1383号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444  
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

## 4/18政治戦 1市2町で6人が当選

### 「原発ノー」「命・くらしを守る」

#### 総選挙勝利・躍進へ、さらに

松江市長選・市議選の投票率が18日行われ、市議選では、田中肇氏が2期目の当選を果たし、舟木健治、橘ふみ両氏が初当選を勝ち取りました。市長選は、日本共産党公認・前市議の吉儀敬子氏が健闘しました。

#### 松江市長選 田中・舟木・橘ふみ氏3議席確保

日本共産党の田中肇、舟木健治、橘ふみ各氏は定数34名に対し、41名が立候補する多数大激戦の中、「原発再稼働」「コロナ危機から、くらしと命を守る」3議席を」と訴え、現有議席を守りました。

#### 松江市長選 吉儀氏 大健闘

3月19日の立候補表明以来、島根原発2号機再稼働反対、くらし・子育て応援の松江などを強く訴えてきた日本共産党公認・前市議の吉儀敬子氏は5974票を獲得しました。得票率は6・04%でした。吉儀氏は「島根原発2号機再稼働ノー」という市民のみなさんの思いを、私への投票で託していただいた。今後も引き



投票開票翌日、街頭で公約実現への決意を述べる(右から)橘祥朗、吉儀、尾村、橘ふみ、舟木、田中の各氏(19日、松江市)

#### 雲出町議選

#### 川西・田食氏 激戦制す

日本共産党の川西明德、田食道弘の両氏は定数14名に対し、17名が立候補する大激戦の中、「コロナから命とくらしを守る町政を」と強調し、コロナ対策や生活支援を国や県、町へ求めていくことなどと訴え、現



田食道弘氏



川西明德氏

続き、「島根原発は動かさないでほしい」と願う市民のみなさんと力を合わせて、原発のない松江を

子や孫に手渡せるよう力を尽くしていきたく」と語りました。(投票率60・23%)

有2議席を守り、引き続き、議案提案権を確保し

川西 明德(現) 418票・12位  
田食 道弘(現) 490票・10位

#### 南陽町議選

#### 日高氏 初当選し空白克服

日本共産党・新人の日高八重美氏が初当選し、4年前に失った党議席の空白を克服しました。定数13名(2減)に14名が立候補する少数激戦を制しました。日高氏は、広島市生まれで被爆2世の日高候補は2014年、夫の退職を機に南陽町へ。看護師として町社会福祉協議会



日高八重美氏

のデイサービスで働いた経験を持ちます。選挙中は、コロナ禍からこそ一人にやさしい町を」と強調し、▽国保税、介護保険料の負担軽減▽高校卒業までの医療費無料化、学費補助の対象拡大▽医療機関への財政支援とPCR等検査体制の強化▽買い物、通院の交通手段の確保▽家族農業への支援強化などの政策を訴えました。開票結果は次の通りです。  
日高 八重美(新) 514票・5位

#### 出雲市議選2議席獲得 後藤氏再選、吉井氏初当選

4月11日投票開票された出雲市議選(定数30、2減、立候補33人)では、日本共産党の後藤由美氏が2期目の当選を果たし、吉井安見氏が初当選を勝ち取りました。両氏は▽県内8市で一番高い国保料引き下げ▽中学校卒業まで医療費と給食費の無料化などを訴えました。開票結果は次の通り。

後藤 由美(現) 2920票・13位  
吉井 安見(新) 2307票・22位

学生食料支援  
ハッピーフードプロジェクト  
5月2日(日)  
午前10時～午後2時  
会場：キッチンスタジオナド(等)  
松江市西川津町 3234-2

- 食料品や日用品の提供にご協力ください
- マイバッグをご持参ください
- マスクの着用をお願いします
- 一緒にお手伝いして下さるボランティアも募集中です

主催：民青同盟島根県委員会

#### 鼓動

気づけば桜の時期は過ぎ、藤の花が咲き始めたという。そんなニュースにまだ違和感を抱くのは、コロナ禍の中、季節の推移にも鈍感になってきたからなのか▼思えば足早に過ぎた一年だった。今年の今頃は正体不明のウイルスと、パンデミックという耳慣れない単語に翻弄される日々の始まりの中にいた。「緊急事態宣言を發出します」と、あの日不自然なほど高らかに聞こえた安倍前首相の声と表情は、なぜか今でもすぐに思い出せる▼あれから今日まで、どれだけの宣言や要請を私たちは耳にしたことか。首相が、各地の首長が、国民に、県民に、市民に、多くの「コトバ」を投げかけた。その中には、私たちの心に届いたものはどれほどあったらう▼繰り返さされた同じようなコトバ。そこには、感染症という見えない存在に怯え、模索しながら暮らす私たちの心に、深く温かく響くものは少なかつた。なぜならそれは音としての「コトバ」であり、人の心を種とする「言葉」ではなかつたからだろう。そんなコトバを浴びせられ、徐々に鈍化されつつある私たちの感性。決して政府が言うようなコロナ禍の生活への慣れなどではなく、感性の鈍化という危機▼そんなことを思っていた折、旭爪あかね『稲の旋律』を読んだ。昨年急逝した彼女の作品は五感をフル稼働させ生み出したに違いない表現と、人への優しい言葉に溢れていた。それは、鈍化していた私の感性も目を醒めさせてくれるものだった。自らを肯定できず生きづらさを抱えた主人公が、眼前に広がる稲穂の波間にパツヘルベルのカノンの調べを心の耳で捉え、希望を感じたと同じように。(江)